

# 目的別系譜図にみる景観研究の動向 —08年から17年を対象として—

柴田 久<sup>1</sup>・齋藤 勝弘<sup>2</sup>・池田 隆太郎<sup>3</sup>

<sup>1</sup>正会員 福岡大学教授 工学部社会デザイン工学科 (〒814-0180 福岡県福岡市城南区七隈8-19-1)

E-mail: hisashi@fukuoka-u.ac.jp

<sup>2</sup>学生会員 福岡大学 大学院工学研究科 (〒814-0180 福岡県福岡市城南区七隈8-19-1)

E-mail: td184007@cis.fukuoka-u.ac.jp

<sup>3</sup>正会員 福岡大学助手 工学部社会デザイン工学科 (〒814-0180 福岡県福岡市城南区七隈8-19-1)

E-mail: rikeda@fukuoka-u.ac.jp

本研究では2008年から17年までの10年間に発表された景観研究論文を対象に、研究目的別の系譜図を作成した。さらに先行研究の成果を踏まえ、作成した系譜図に対する考察から、景観研究の動向と今後の課題について検討した。その結果、景観研究論文として484編が選出され、35の研究視点による目的別研究系譜図が導出された。さらにそれら系譜ごとの考察を行ったうえで、景観研究の動向と今後の課題として1) 自然的・文化的風景を巡る保全論の再提起や、2) 防災と景観を両立させる思想論・方法論の検討、3) 質の向上を図る制度推進に有効なデザイン手法の提示について考察がなされた。

**Key Words :** genealogy by the purpose, landscape research, trend, research issues

## 1. はじめに

景観法の公布から約15年が経過した。この間、各種社会基盤施設や町並みの整備において、景観保全に向けた計画や規制、具体的な事業が法的根拠を持ちつつ進展し、「景観に配慮すること」が社会通念として理解される時代に到達したものといえる。しかし、その一方で景観計画の実効性や景観施策を推進していくうえでの様々な課題も指摘されている。我が国では2011年に東日本大震災、2016年には熊本地震が発生し、度重なる豪雨等による浸水被害も頻発している。また人口減少の深刻化や地方都市の衰退など、社会的な課題も山積している状況にある。景観研究の分野においてもこうした我が国の課題や状況の変化にいかに対応していくべきか、さらには貢献すべき研究の展開や方向性について論じられる必要がある。これに対し筆者らは1960~98年、続く1998~2007年を対象に、それら期間ごとの景観研究の系譜図を作成し、その動向について考察を行っている<sup>1,2)</sup>。これら2007年以前と合わせ、近年までの研究動向を比較検討することは、前述した社会的状況変化に伴う景観研究の動向をより経年的に整理でき、有益な知見になるものと考えられる。一方、造園学分野の成果として、近年

までの風景論研究の動向が整理されているもの<sup>3)</sup>、対象とする空間的範囲は原生自然や農村までとし、国立公園や自然公園に対する論考が主であること、また土木系景観研究については触れられていない。

本研究では、以上の問題意識や既存研究の状況を踏まえ、前述した先行研究<sup>1,2)</sup>の継続研究として、2008~17年までの10年間に発表された景観研究論文の目的別研究系譜図を作成する。さらに上記先行研究の成果を参照しつつ、各系譜図の動向と今後に向けた研究課題について考察する。

## 2. 研究手順

### (1) 対象研究の選定と内容の整理

系譜図の作成に当たり、2008~17年までに発表された主要な審査付き論文として、土木学会論文集D、土木計画学研究・論文集(土木学会論文集D3)、日本建築学会計画系論文集、日本都市計画学会学術研究論文集、日本造園学会「ランドスケープ研究」、日本造園学会「ランドスケープ研究(オンライン論文集)」を選定し、その中からタイトルのキーワード検索によって景観研究論文を抽

出した。検索のキーワードは経年的考察や連続的な傾向の把握を企図し、先行研究<sup>1)2)</sup>と同じ「景観、風景、タウンスケープ、空間把握、スカイライン、眺望、視覚、視空間、都市デザイン、空間デザイン、デザインガイドライン、伝統的保存、保存地区、保存行政」の計14を設定した。次に検索によって抽出された研究内容を精査し、視覚障がい者の空間認知といった障がい福祉に関する研究等を除外した。これらの抽出結果と土木学会・景観・デザイン研究論文集、土木学会論文集D1の全掲載論文をあわせ、計484編の論文を選出し、対象論文とした。

系譜図の作成方法においては、選出された論文を精読し、一次整理として「背景・目的」「対象景観」「分析方法」「結論」「課題」「参考文献(本研究では研究目的に着目した系譜と経年的推移の把握を主眼としているため、主に研究の背景に記述された研究意義、方向性、着眼点等に直接影響を及ぼしたとされる文献を抽出し、関連・類似した既存研究の概観等については除外している)」に加え、参考文献で示されている研究の位置づけや結論として得られた知見からの「発展面・相違点」、以上7項目に基づき、研究内容を整理した。

(2) 分類と系譜図の導出

本研究では前述した一次整理に加えて、先行研究との継続的かつ経年的な研究動向の把握を目的とし、同先行研究で得られた34の研究視点を基に、上記484論文の分類を試みた。なおこれらの研究視点は前述した項目「背景・目的」の整理内容に対するKJ法を用いた分類から得られている。前述した既存研究<sup>3)</sup>では、国立公園等の自然的領域を中心に景観研究の収集と整理がなされているのに対し、本研究では研究目的に基づく論文の整理によって、研究毎の対象領域や分析手法、成果等の特徴を比較考察する狙いがある。また「背景・目的」に着目した理由は、系統的な研究動向を最も反映させていること、研究者が持つ問題意識を浮かび上がらせることで景観に対する論点を明確に出来ると考えたためである。

表-1 研究視点

1. 景観素材・資源の管理利用	19. 景観・風景の概念追求
2. 自然景観への影響把握	20. 多面的景観論の提示
3. 景観保護の意味を明示	21. 変動要因の影響把握
4. 歴史的景観の保存	22. 変遷景観の特性把握
5. 制度の運用に対する評価・有効性の把握	23. 歴史的名所の景観特性の把握
6. 動向・現状の把握	24. 設計・計画思想史の解明
7. 事業効果の把握	25. 植生景観の史的解明
8. 評価軸の検討と方法論の確立	26. イメージ・認識構造の把握
9. 属性による評価への影響・把握	27. 原風景・心象風景の把握・応用
10. 「住民」を中心とした計画づくり	28. シミュレーションシステムの開発
11. 日常スケールでの計画づくり	29. 視覚的效果・影響の測定
12. 台意形成手法の検討	30. 色彩の調和
13. 調査手法における安定性の検討	31. 眺望を確保した計画づくり
14. 空間構造の把握	32. シークエンス景観特性の把握
15. 地方固有要素の構造解明	33. テクスチャの応用
16. 景観構成要素と全体評価との関連性の把握	34. 視覚認知特性の解明
17. 景観類型の抽出	35. 文化的景観の保存
18. 有効なデザイン手法の提示	

また本研究における上記484論文の分類を行うなかで、研究目的として明記されるとともに論文数の増加が認められた「文化的景観の保存」が35番目の研究視点として抽出された。結果的に表-1に示す35の研究視点毎に系譜図を導出し、先行研究と同様に「結論」「参考文献」「発展面・相違点」の内容から特徴的な傾向や動向について考察を行った。

3. 目的別研究系譜図の導出と研究動向

(1) 選出論文数の推移と分類

選出された景観研究について論文数の推移を図-1に示す(ここでは研究動向を明確化するため、先行研究<sup>1)2)</sup>より1960年からの論文数推移の結果を加えている)。先行研究から90年代は景観研究の拡充期とされ、99年にピーク(全論文数56編)を示した後、00~05年までの6年間では39~46編程の安定した発表が行われ、07年には60編を越え、10年には73編にまで達していることがわかる。しかし、11年からの論文数は減少傾向にあり、17年には33編の研究数となっている。

次に学会ごとの論文数の推移を図-2に示す。これより

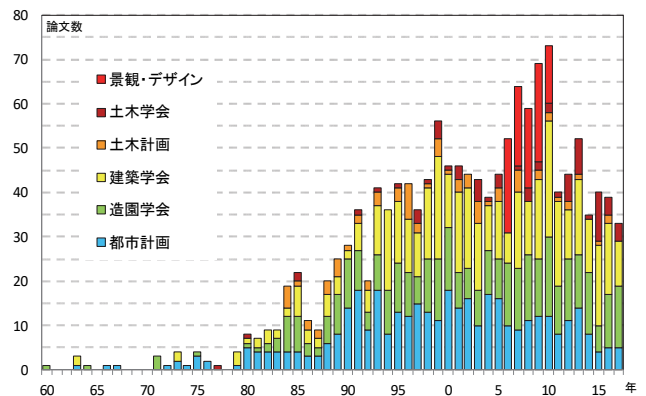


図-1 選出論文数の推移

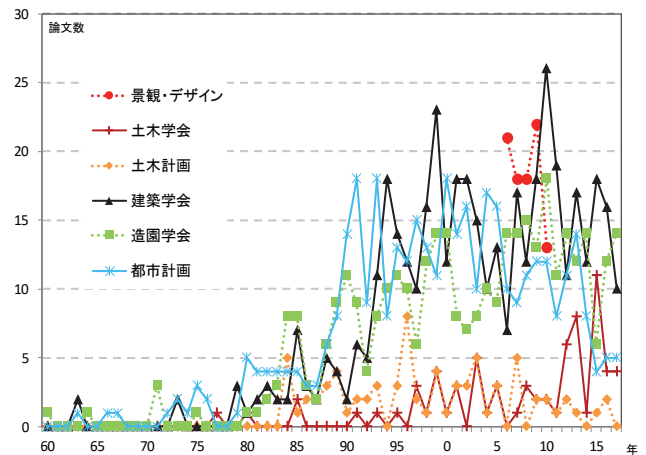


図-2 学会ごとの論文数の推移

都市計画・造園・建築分野では、過去20年以上に渡り、年間平均10編以上の安定した発表がなされ、94年～01年までの8年間では、都市計画と建築における増減の年変動がほぼ逆になっている動向が得られた。これに対し、08年からの10年間では、都市計画と建築の論文数変動はおおよそ類似し、11年以降は建築と造園学分野の論文数変動が相反している傾向が看取された。景観研究拡充期の90年代は都市計画と建築学会に重複所属する景観研究者が多く、08年以降では建築と造園学の重複所属の多い可能性が指摘できうる。またそうした景観研究者が研究対象に合わせて投稿学会を選択していることや景観研究の成果が発表されるまでに2年ほどの期間がかかっている可能性も推察される。また11年には全分野の論文が揃って減少に転じているが、東日本大震災の影響や景観・デザイン論文集の土木学会論文集D1(景観・デザイン)分冊(随時投稿可)への移行も一要因として考えられる。

## (2) 系譜図にみる景観研究の変遷

ここでは導出された35研究視点ごとの研究系譜図をもとに、その動向について述べる。また特徴的な動向として、表-1に示した研究視点の1, 4～6, 35を含む a) 自然的景観、歴史的景観保全に対する制度的現状、同様に b) 景観整備に関わる事業効果と合意形成(7, 10, 12, 28), c) 景観変容と評価手法の検討(8, 9, 21, 22, 24, 25), d) 景観設計に資する方法論の記録と視覚的景観論(11, 15, 16, 18, 23, 27, 29～32, 34), e) 景観に対する認識ならびに多面的評価とその手法論(13, 20, 26, 33)の5つの括りを示し、以下詳述する。

### a) 自然的、歴史的景観保全に対する制度的現状の把握

まず[景観素材・資源の管理利用]研究は、ここ10年ほぼ連続して行われており、樹林地や農地、生垣を対象とした論文が複数見られる。16年には地域資産としての棚田・段畑の保全を念頭に、石積み技術の継承を論じた研究が見受けられる<sup>4)</sup>(図-3)。これらの研究には08年以前と同様に、景観資源の維持管理に対する人的財政的困難さ、生態系保全に向けた役割等が課題として掲げられ、継続性のある研究テーマといえる。一方、より暮らしや生業との関連性から景観保全を論じる[文化的景観の保存]研究が、ここ10年の確立した研究視点として抽出された(図-3)。論文数も38編が該当し、伝統的な集落や河川、水路などが主な対象となるなか、中山間地域の茶園景観に関する研究<sup>9)</sup>やアンデス<sup>6)</sup>、イタリア<sup>7)</sup>といった海外事例、さらに17年には四万十川の文化的景観保全に向けた大規模太陽光発電施設計画の対応についても考察がなされている<sup>8)</sup>。対象とする文化的景観自体の形成要因を分析し、保全に向けた示唆を行う研究が主であるなか、12年以降は保全を巡る人的な活動、仕組み、影響等について論じる研究が多くなってきている。

これに対し98～07年では特に建築分野において一定数の研究がみられた[歴史的景観の保存]が今期も21編抽出されている(図-3)。これまでと同様に伝統的な集落や建造物群の景観を対象とするものが多いなか、京都北山の山容景観<sup>9)</sup>や庭園の樹林景観<sup>10)</sup>など、自然地に対する論考もみられる。

また主に景観行政に対する「動向・現状の把握」研究がほぼ毎年行われており、伝建地区<sup>11)</sup>や景観計画運用にかかわる報告、課題等の整理が行われている<sup>12)</sup>。一方、類似する研究視点として[制度の運用に対する評価・有効性の把握]も53編抽出され、08～12年までは、ほぼすべての研究で景観法の運用課題や可能性についての言及がなされている(図-4)。一方、12年以降では景観法の運用実態や限界を明確化したうえで、課題解決に資する事例検証型の研究が増加している<sup>13)</sup>。そのほか景観を巡る政策と自治基盤の再構築の関係性を明らかにしたものの<sup>14)</sup>やイタリアのウルバーニ法典に着目し、景観の定義や許認可等の観点から、従来のガラッソ法における景観計画との違いについて明らかにしたものの<sup>15)</sup>等が見受けられた。

### b) 景観整備に関わる事業効果と合意形成

次に景観整備に関連した[事業効果の把握]研究も行われ、特定エリアの具体的な整備事業を対象とする他、都市デザイン教育<sup>16)</sup>や景観デザイン審査<sup>17)</sup>、アートプロジェクト<sup>18)</sup>など、人的なソフト事業の成果について論じたものが散見される(図-4)。また把握しにくい景観整備効果の発現傾向をプロセスモデルに基づく分析によって検証した研究もみられた<sup>19)</sup>。また景観形成の経済効果を基に景観整備方策の提案を行った研究<sup>20)</sup>やグリーンインフラの概念に基づく浸透性街路空間デザインの効果について、都市水害対策となる流出抑制の観点から明らかにした研究等<sup>21)</sup>が見受けられる。先行研究<sup>12)</sup>より90～98年に10編、98～07年では12編が該当した[事業効果の把握]研究は、ここ10年間で27編と増え、具体的なプロジェクトを対象とした事例検証型景観研究の定着が挙げられる。

まちづくりにおける住民参加が一般化したなか、[合意形成手法の検討]や[「住民」を中心とした計画づくり]に関する研究も散見され、建築系研究者による論考が比較的多い(図-4)。従来からの策定プロセスに対するケーススタディ<sup>22)</sup>に加え、クラウド型のVRシステムの有用性について論じた研究<sup>23)</sup>など、情報共有技術の進歩も見受けられる。一方、東日本大震災後の気仙沼市内湾地区における防波堤計画の合意形成プロセスについて検証した研究もみられる<sup>24)</sup>。また上記インターネットの普及やコンピュータ性能の向上と相まって[シミュレーション・システムの開発]研究も継続的に行われており、





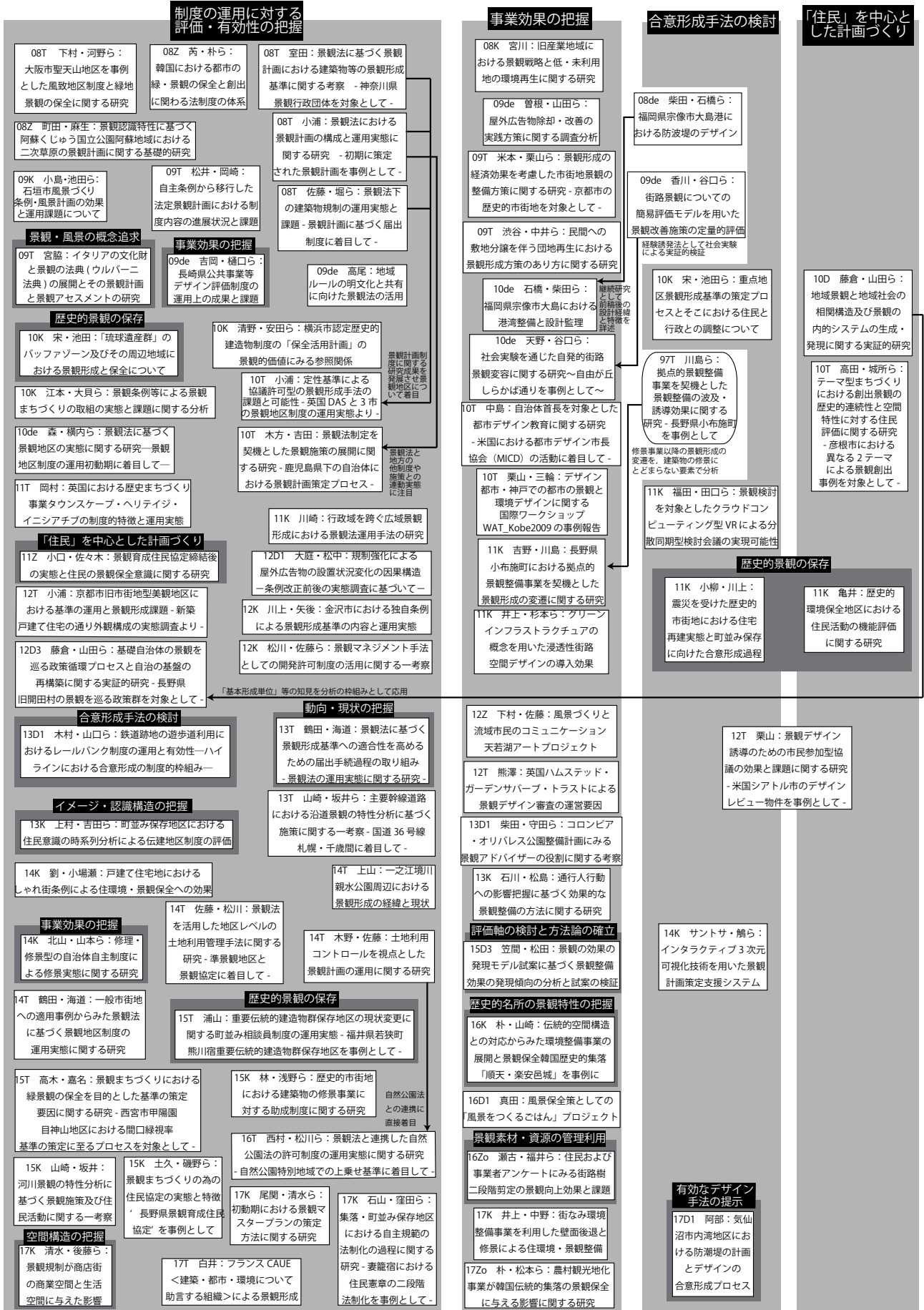


図4 研究系譜図(制度の運用に対する評価・有効性の把握, 事業効果の把握, 合意形成手法の検討など)

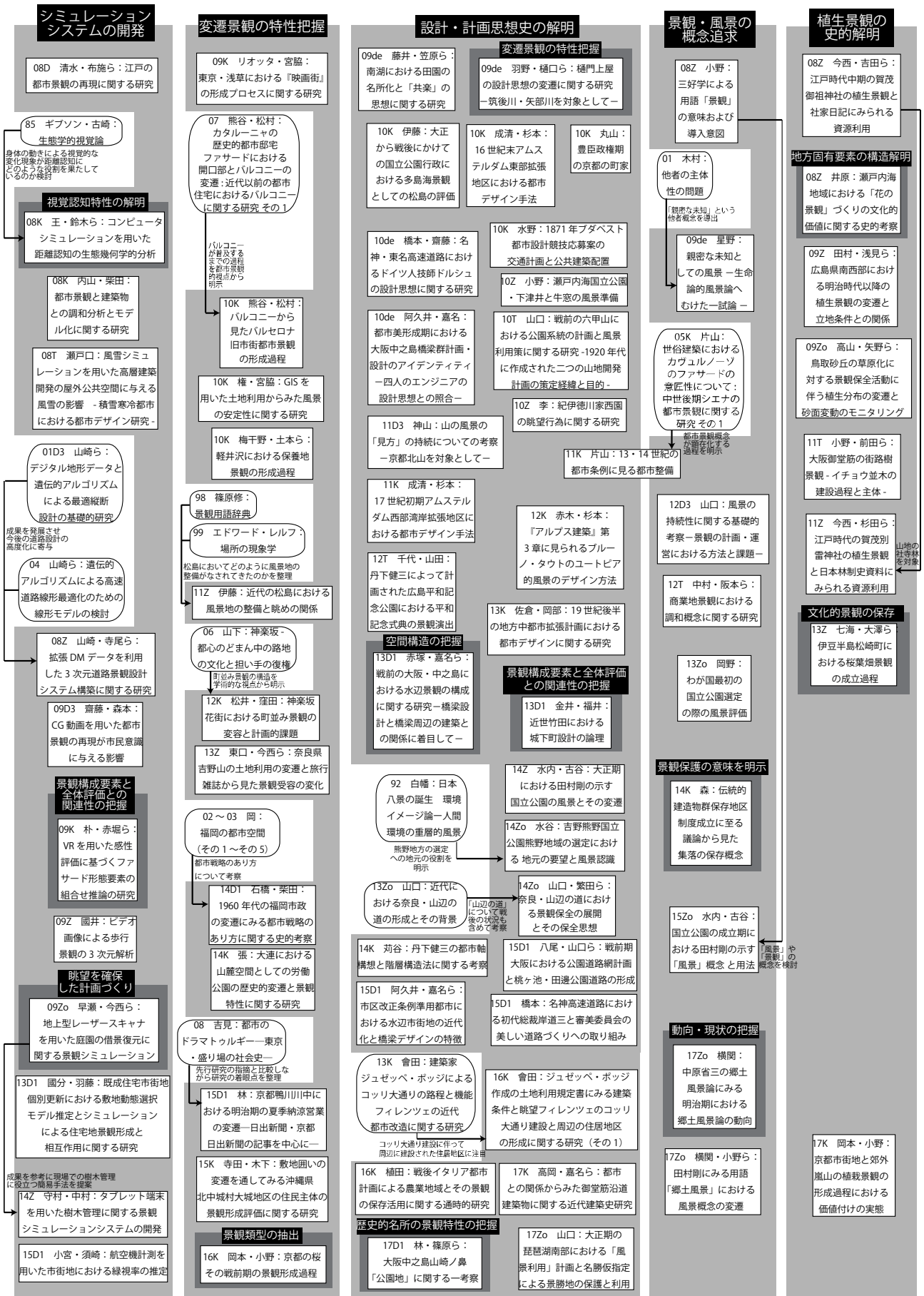


図5 研究系譜図(シミュレーションシステムの開発, 変遷景観の特性把握, 設計・計画思想史の解明など)

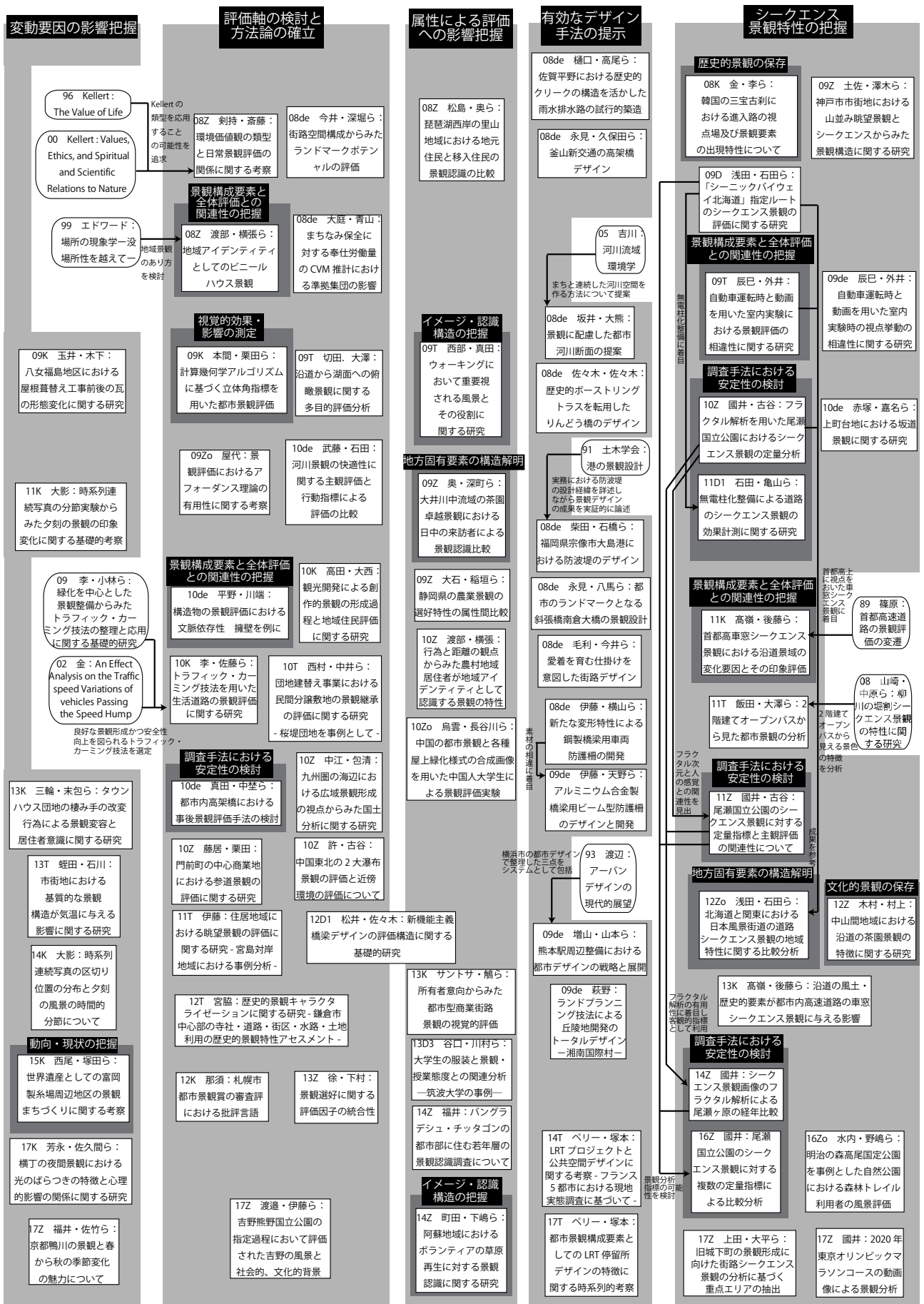


図6 研究系譜図(変動要因の影響把握, 評価軸の検討と方法論の確立, 属性による評価への影響把握など)



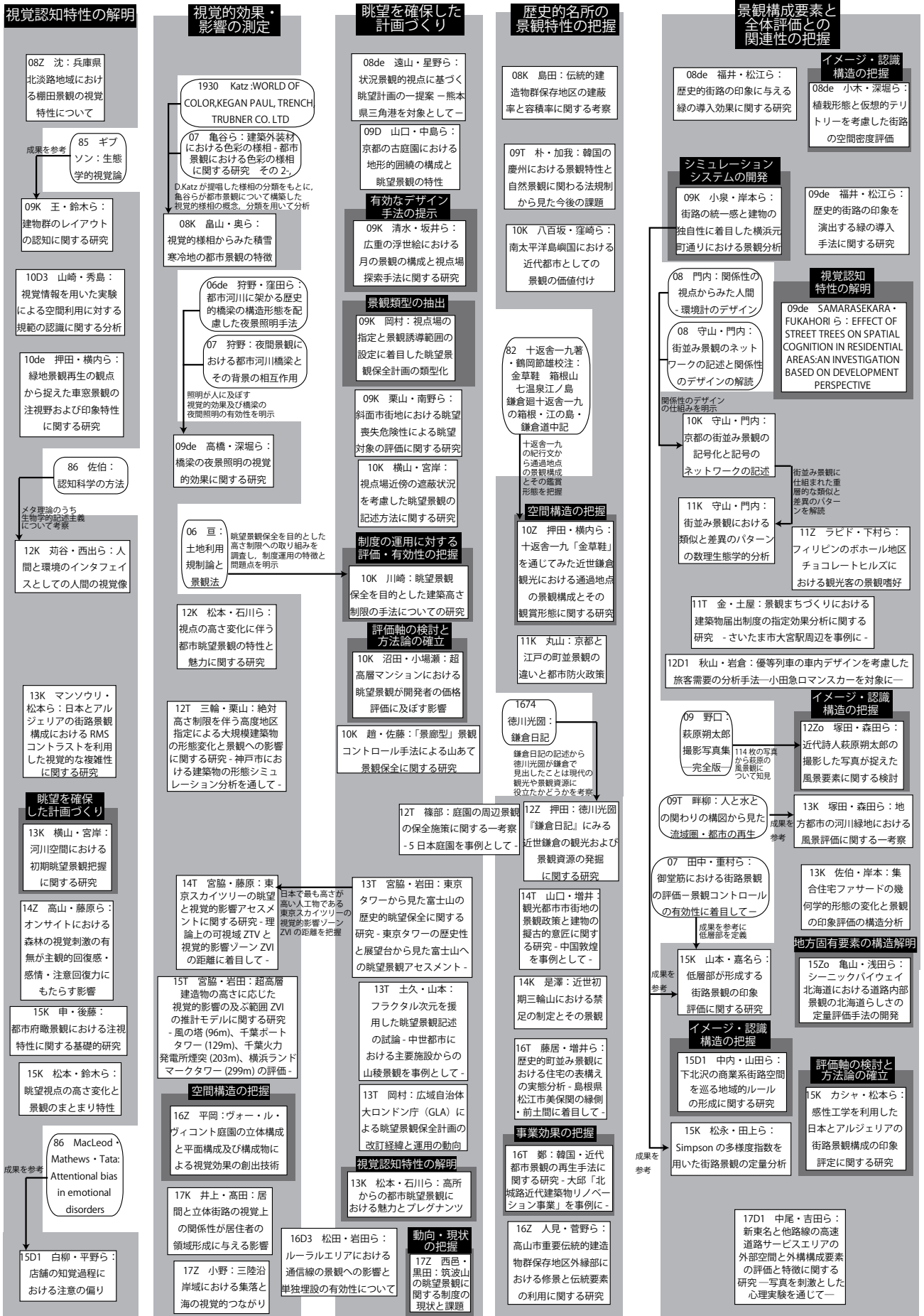


図-7 研究系図(視覚認知特性の解明, 視覚的効果・影響の測定, 眺望を確保した計画づくりなど)



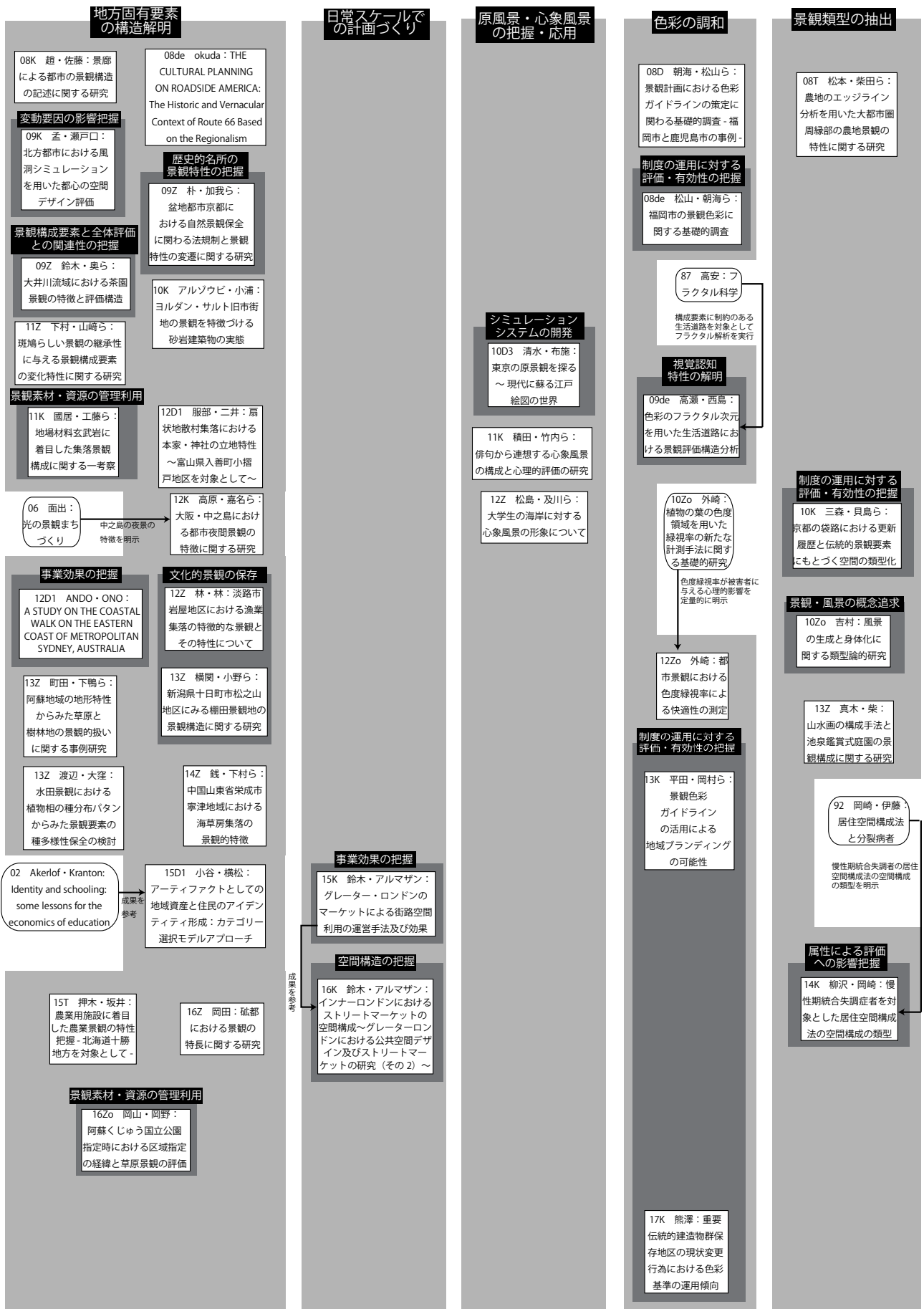


図-8 研究系譜図(地方固有要素の構造解明, 日常スケールでの計画づくり, 原風景・心象風景の把握・応用など)

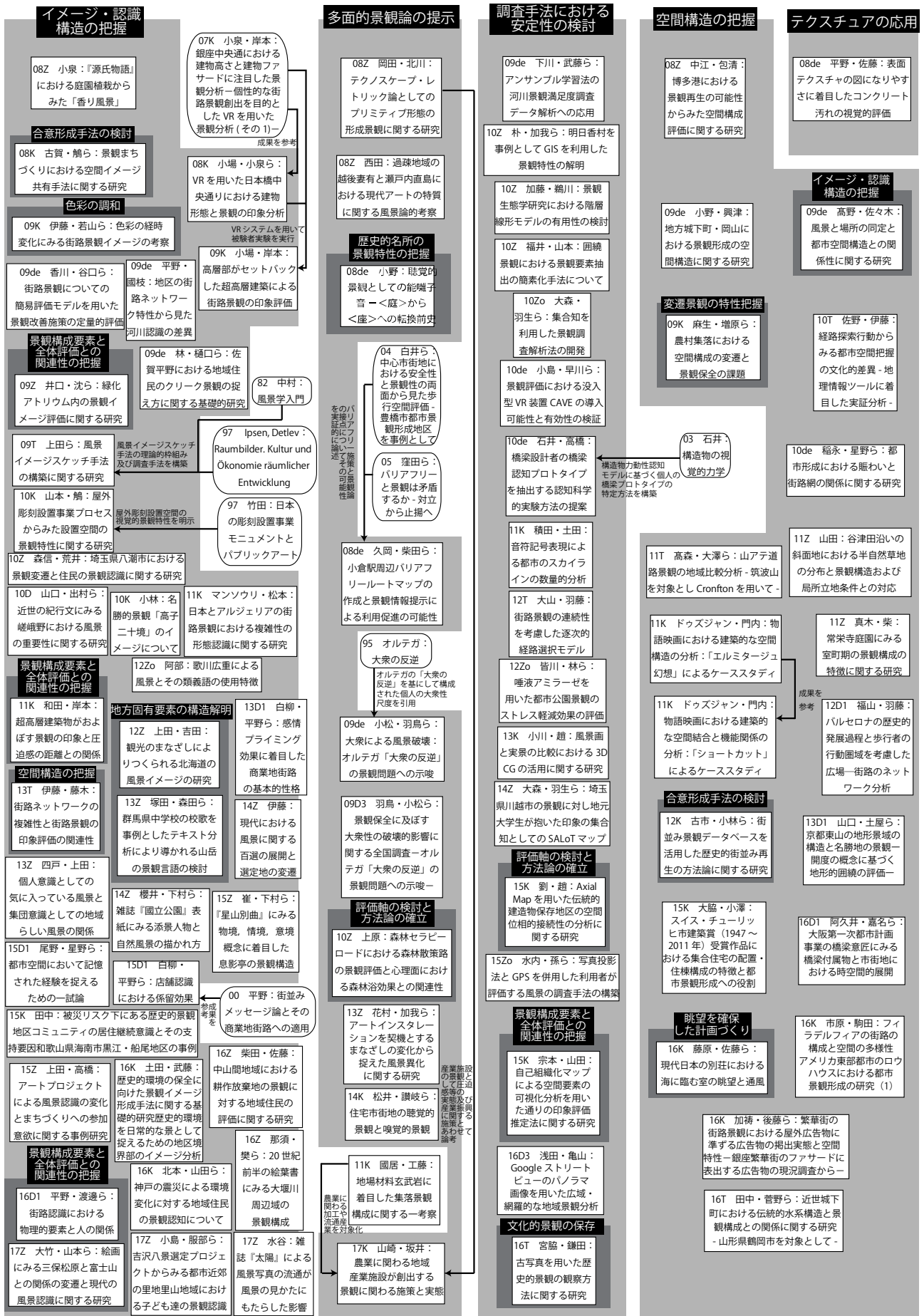


図9 研究系図(イメージ・認識構造の把握, 多面的景観論の提示, 調査手法における安定性の検討など)

江戸の都市景観を再現する成果<sup>29)</sup>によってCG (Computer Graphics) の有効性を例証した研究がみられる (図-5)。

#### c) 景観変容と評価手法の検討

史的考察を中心とした「変遷景観の特性把握」研究は14編抽出され、神楽坂花街の町並み景観<sup>29)</sup>、京都鴨川納涼場<sup>29)</sup>について明らかにしたものと等がみられる (図-5)。一方で近代以前を対象とせず、1960年代の福岡市の都市戦略について論じた研究も行われている<sup>28)</sup>。同様に歴史研究の視点をもつ「設計・計画思想史の解明」は31編抽出され、6編であった98～07年に比べて大幅に増加している (図-5)。ここでは国立公園行政における多島海景観としての松島の評価を文献調査より考察<sup>29)</sup>したものや近世竹田における城下町設計の論理<sup>30)</sup>について明らかにした研究が見受けられる。また比較的に関西地域の事例が研究対象として多く取りあげられているなか、その後の道路計画に影響を及ぼした戦前期大阪の公園道路網計画<sup>30)</sup>や大正期の琵琶湖南部における景勝地の保護<sup>30)</sup>について論じた研究がみられる。一方98～07年には抽出されなかった「植生景観の史的解明」研究が8編、主に造園分野において発表されている (図-5)。また「変動要因の影響把握」を視点とした研究も10編みられ、景観構造の変動によって与えられる気温への影響を検証したもの<sup>30)</sup>などが見受けられる (図-6)。

一方「評価軸の検討と方法論の確立」研究が27編、「属性による評価への影響把握」研究も12編抽出され (図-6)、98～07年に比べてやや論文数の減少が把握される。評価軸の検討に関しては、既に建替えが完了した団地の民間分譲敷地において、継承すべき景観の種類や継承時の留意点を明らかにした研究<sup>30)</sup>や都市内高架橋の事後景観評価手法<sup>30)</sup>や構造物の景観評価における「文脈効果」<sup>30)</sup>の影響に着目したものがみられる。また「属性による評価への影響把握」は比較的造園学分野での成果が多く見受けられ、茶園景観に対する日中の来訪者認識の違い<sup>30)</sup>やグリーンツーリズムへの展開<sup>30)</sup>など、観光を意識した研究が行われている (図-6)。

#### d) 景観設計に資する方法論の記録と視覚的景観論

98～07年では20編抽出されていた「有効なデザイン手法の提示」研究は、今期15編抽出され、歴史的ボーストリングトラスを転用したりんどう橋<sup>30)</sup>や橋梁用防護柵<sup>40)</sup>といった土木構造物に関わる成果が見受けられる。一方でこれら有効なデザイン手法の提示研究は2010年以降の8年間では3編にとどまっている現状が見取れる (図-6)。一方98～07年では12編見られた「シーケンス景観特性の把握」研究は今期も19編抽出され、継続的な知見の蓄積として、特に造園分野において盛んに発表されている。傾向としてフラクタル解析による景観分析<sup>40)</sup>が散見されるなか、研究のほとんどが景観画像

を用いた分析アプローチを採用している (図-6)。また「視覚認知特性の解明」、「視覚的效果・影響の測定」は98～07年と同程度数の研究が行われており、「眺望を確保した計画づくり」の抽出数は8編から19編に増加している。一方、「歴史的名所の景観特性の把握」研究も散見され、信仰地としての三輪山の景観<sup>40)</sup>や十返舎一九「金草鞋」の読み取り調査から鎌倉観光を論じた研究<sup>40)</sup>などがみられる (図-7)。また「景観構成要素と全体評価との関連性の把握」も継続的に行われており、「地方固有要素の構造解明」研究として、洪水対策に用いられてきた地場材料の玄武岩に着目した集落景観構成とその変容を明らかにしたもの<sup>40)</sup>や地域資産と住民のアイデンティティ形成に着目した研究<sup>40)</sup>などが見受けられる (図-8)。また研究数は少ないものの98年～07年では見られなかった「日常スケールでの計画づくり」研究が2編抽出され、「原風景・心象風景の把握・応用」や「色彩の調和」研究も散見される (図-8)。

#### e) 景観に対する認識ならびに多面的評価とその手法論

上記視覚的景観論から心的な景観評価への影響を論じた「イメージ・認識構造の把握」研究がこの10年においても多数行われている (図-9)。従来の研究と同様に景観イメージ画像を用いた評価実験に対する定量的分析が特に建築分野で多くみられる一方で、感情プライミング効果に着目した商業地街路の認知を明らかにした研究などが土木分野において論じられている<sup>40)</sup>。さらにテキストマイニングによる分析<sup>40)</sup>も散見され、都市空間において記憶された経験に着目し、その特性を論じた研究等も見受けられる<sup>40)</sup>。さらに景観解釈の多面性や可能性を論じた「多面的景観論の提示」研究も見受けられ、政治哲学の理論から景観問題に及ぼす意識的影響について論考したもの<sup>40)</sup>や森林散策路における心理面の評価と空間評価との関係性を分析したものがみられる<sup>30)</sup> (図-9)。さらに地域産業施設の建築規模と植栽の実態を明らかにし、景観施策のあり方について論じたもの<sup>50)</sup>もみられ、人工構造物によって形成される「テクノスケープ」の意味論的考察から、産業景観に対する実態的な研究アプローチへの展開が看取された。

最後に景観を把握・分析する手法の精度や有効性を検証する「調査手法における安定性の検討」研究が継続的に行われており、13編抽出された98～07年と比べて22編と増加している。ここではプローブパーソンデータを用いながら街路景観の連続性によって与えられる回遊行動への影響を論じた研究<sup>50)</sup>や、AxialMapを用いた街路空間の接続性について分析した研究<sup>50)</sup>等が見受けられる。一方、98～07年では見られなかった「テクスチュアの応用」研究が1編抽出され、コンクリート構造物の汚れに対する視覚的評価がなされている<sup>50)</sup>。



#### 4. 景観研究の動向と今後の課題について

##### (1) 自然的・文化的風景を巡る保全論の再提起

先行研究より景観研究が行われ始めた揺籃期から初動期にかけては、公害問題に揺れる社会情勢と政策的ニーズも相まって、自然環境保全の研究対象として景観が論じられていたことは既に明らかとなっている。一方08~17年の特徴的な研究動向として、[景観素材・資源の管理利用]や98~07年には抽出されなかった[植生景観の史的解明]研究の増加、ならびに新たな視点として[文化的景観の保存]研究が多数見受けられた。文化庁によると2018年2月時点の重要文化的景観は61件、そのうち54件(約89%)が本研究対象期間の08~17年に選定されており<sup>5)</sup>、そうした政策的活発化が上記研究活動の促進に繋がったものと考えられる。前述した初動期までの議論と近似し、荒廃の深刻な自然的かつ文化的風景の保全と我々の生活を支える社会基盤施設整備との調和に向けて景観研究の成果がいかに貢献できるか、今後の研究課題として再提起されているものと推察される。

##### (2) 防災と景観を両立させる思想論・方法論の検討

一方で[地方固有要素の構造解明]や[事業効果の把握]研究において、防災施設に対する地場材料や自然素材等の積極的活用に関わる論考が散見された。2015年度に閣議決定された国土形成計画、第4次社会資本整備重点計画においても「グリーンインフラ」の推進が盛り込まれ、現在その政策的有用性が盛んに検証されている。震災や近年多発する豪雨、台風被害を受け、復旧・復興事業のあり方、ならびに防災政策における自然の活用可能性が今後ますます重要なテーマとなるだろう。震災後の既に完成している施設の評価を含め、人々の暮らしを守る防災事業と景観の魅力の保持をどのように両立させていくか、自然や地場材料を活かすことへの思想的論考や具体的な方法論、事業の成果等について整理される必要がある。

##### (3) 質向上の制度推進に有効なデザイン手法の提示

さらに景観研究の全体傾向として2010年をピークに研究数の減少が把握され、特にこれまで一定の論文数と成果が出され続けてきた[有効なデザイン手法の提示]研究が減少している傾向が看取された。98~07年の動向を含め、2009年以前は土木学会における該当研究数が最も多かったのに対し、同学会デザイン賞においても2011~17年までの平均応募作品数は14.4件と、それ以前の7年間の平均25.3件に比べて少なくなっている<sup>5)</sup>。一方、土木学会は2018年に土木施設や公共空間のデザインの質向上を図るため、それらの設計に「デザインコンペ方

式」を導入するための指針「土木設計競技ガイドライン」を出版している。今後は土木デザインの競争力強化を見据えた研究成果の蓄積が課題として挙げられよう。特にこれまでの事例を中心とした具体的な構造物のデザイン評価はもとより、そうしたデザインを可能にさせた制度や設計前に貢献した調査方法上の工夫点等についても知見の蓄積が求められる。また受賞等の実績を持つ優れた事例の総括的な報告だけでなく、一般的なデザイン事例であっても評価すべき部分、改善点を論考あるいは提案する研究の意義についても考えていく必要があるだろう。

#### 参考文献

- 1) 柴田久, 土肥真人: 目的別研究系譜図からみた景観論の変遷に関する一考察, 土木学会論文集, No. 674/IV-51, pp. 99-111, 2001.
- 2) 柴田久, 石橋知也: 目的別系譜図にみる景観研究の動向—98年から07年を対象として—, 景観・デザイン研究論文集, No. 7, pp. 121-132, 2009.
- 3) 水内佑輔: 風景計画—風景論から実践的自然風景地の計画・管理まで—, ランドスケープ研究, Vol. 82, No. 1, 日本造園学会, pp. 12-21, 2018.
- 4) 岡本昌, 真田純子: 徳島県の棚田・段畑の石積み継承に向けた維持管理状況と技術に関する研究, 土木学会論文集 D1, Vol. 72, No. 1, pp. 1-12, 2016.
- 5) 木村真也, 村上修一: 中山間地域における茶園景観に関する研究—滋賀県東近江市奥永源寺地域について—, 日本都市計画学会学術研究論文集, Vol. 46, No. 3, pp. 151-156, 2011.
- 6) イシザワ・マヤ, 石川幹子, 福井弘道: アンデス農村地域の文化的景観の変容, 日本都市計画学会学術研究論文集, No. 44-3, pp. 427-432, 2009.
- 7) マッテオ・ダリオ・パオルッチ: 法律システムからみたイタリアにおける文化的景観の保存, 土木計画学研究論文集, Vol. 43, No. 3, pp. 529-534, 2008.
- 8) 小浦久子, 秋月裕子: 景観の公益に対する再生可能エネルギーの公益との調整にみる計画課題, 日本都市計画学会学術研究論文集, Vol. 52, No. 3, pp. 1171-1176, 2017.
- 9) 神山藍, 出村嘉史, 川崎雅史, 樋口忠彦: 京都北山の山容景観についての考察, 土木学会論文集 D, Vol. 64, No. 2, pp. 266-278, 2008.
- 10) 山田拓広: 桂離宮庭園の樹林景観の変遷に関する一考察, ランドスケープ研究, Vol. 73, No. 5, 日本造園学会, pp. 367-372, 2010.
- 11) 岡辺重雄: 重要伝統的建造物群保存地区内の隣地越境屋根建築を保全する際の建築法令における対応策の研究, 日本建築学会計画系論文集, Vol. 81, No. 719, pp. 143-151, 2016.
- 12) 小浦久子: 景観と土地利用の相互性にもとづく景観計画の開発管理型運用の可能性, 日本都市計画学会学術研究論文集, Vol. 48, No. 3, pp. 585-590, 2013.
- 13) 西村拓也, 松川寿也, 中出文平, 樋口秀: 景観法と連携した自然公園法の許可制度の運用実態に関する研究—自然公園特別地域での上乘せ基準に着目して—, 日本都市計画学会学術研究論文集, Vol. 51, No. 3, pp. 292-298, 2016.

- 14) 藤倉英世, 山田圭二郎, 羽貝正美: 基礎自治体の景観を巡る政策循環プロセスと自治の基盤の再構築に関する研究—長野県旧開田村の景観を巡る政策群を対象として—, 土木学会論文集 D3, Vol. 68, No. 3, pp. 160-179, 2012.
- 15) 宮脇勝: イタリアの文化財と景観の法典(ウルバーニ法典)の展開とその景観計画と景観アセスメントの研究, 土木計画学研究論文集, Vol. 44, No. 3, pp. 421-426, 2009.
- 16) 中島直人: 自治体首長を対象とした都市デザイン教育に関する研究—米国における都市デザイン市長協会(MICD)の活動に着目して—, 日本都市計画学会学術研究論文集, Vol. 45, No. 3, pp. 205-210, 2010.
- 17) 熊澤貴之: 英国ハムステッド・ガーデンサバーブ・トラストによる景観デザイン審査の運営要因, 日本都市計画学会学術研究論文集, Vol. 47, No. 3, pp. 601-606, 2012.
- 18) 下村泰史, 佐藤久恵: 風景づくりと流域市民のコミュニケーション—天若湖アートプロジェクト, ランドスケープ研究, Vol. 75, No. 5, 日本造園学会, pp. 655-660, 2012.
- 19) 笠間聡, 松田泰明: 景観の効果の発現モデル試案に基づく景観整備効果の発現傾向の分析と試案の検証, 土木学会論文集 D3, Vol. 71, No. 5, pp. 281-292, 2015.
- 20) 米本浩也, 栗山直也, 村橋正武, 大窪健之: 景観形成の経済効果を考慮した市街地景観の整備方策に関する研究—京都市の歴史的市街地を対象として—, 日本都市計画学会学術研究論文集, Vol. 44, No. 3, pp. 409-414, 2009.
- 21) 井上薫, 杉本南, 清水裕之, 大西暁生, 村山頭人, 大月淳: グリーンインフラストラクチャの概念を用いた浸透性街路空間デザインの導入効果, 日本建築学会計画系論文集, Vol. 76, No. 660, pp. 335-340, 2011.
- 22) 宋曉晶, 池田孝之, 安里直美: 重点地区景観形成基準の策定プロセスとそこにおける住民と行政との調整について, 日本建築学会計画系論文集, Vol. 75, No. 648, pp. 411-418, 2010.
- 23) 福田知弘, 田口正晴, 清水彩子, 孫磊: 景観検討を対象としたクラウドコンピューティング型 VR による分散同期型検討会議の実現可能性, 日本建築学会計画系論文集, Vol. 76, No. 670, pp. 2395-2401, 2011.
- 24) 阿部俊彦: 気仙沼市内湾地区における防潮堤の計画とデザインの合意形成プロセス, 土木学会論文集 D1, Vol. 73, No. 1, pp. 37-51, 2017.
- 25) 清水英範, 布施孝志, 中田真人: 江戸の都市景観の再現に関する研究, 土木学会論文集 D, Vol. 64, No. 3, pp. 473-492, 2008.
- 26) 松井大輔, 窪田亜矢: 神楽坂花街における町並み景観の変容と計画的課題, 日本建築学会計画系論文集, Vol. 77, No. 680, pp. 2407-2414, 2012.
- 27) 林倫子: 京都鴨川川中における明治期の夏季納涼営業の変遷—日出新聞・京都市日出新聞の記事を中心に—, 土木学会論文集 D1, Vol. 71, No. 1, pp. 26-36, 2015.
- 28) 石橋知也, 柴田久: 1960年代の福岡市政の変遷にみる都市戦略のあり方に関する史的考察, 土木学会論文集 D1, Vol. 70, No. 1, pp. 1-15, 2014.
- 29) 伊藤弘: 大正から戦後にかけての国立公園行政における多島海景観としての松島の評価, 日本建築学会計画系論文集, Vol. 75, No. 656, pp. 2391-2396, 2010.
- 30) 金井雄太, 福井恒明: 近世竹田における城下町設計の論理, 土木学会論文集 D1, Vol. 69, No. 1, pp. 1-12, 2013.
- 31) 八尾修司, 山口敬太, 川崎雅史: 戦前期大阪における公園道路網計画と桃ヶ池・田邊公園道路の形成, 土木学会論文集 D1, Vol. 71, No. 1, pp. 95-107, 2015.
- 32) 山口敬太: 大正期の琵琶湖南部における「風景利用」計画と名勝仮指定による景勝地の保護と利用, ランドスケープ研究(オンライン論文集), Vol. 10, 日本造園学会, pp. 5-13, 2017.
- 33) 蛭田有希, 石川幹子: 市街地における基質的な景観構造が気温に与える影響に関する研究, 土木計画学研究論文集, Vol. 48, No. 3, pp. 1035-1040, 2013.
- 34) 西村亮, 中井検裕, 中西正彦: 団地建替事業における民間分譲敷地の景観継承の評価に関する研究—桜堤団地を事例として—, 土木計画学研究論文集, Vol. 45, No. 3, pp. 781-786, 2010.
- 35) 真田純子, 中埜智親, 伊賀達也, 篠原修: 都市内高架橋における事後景観評価手法の検討, 景観・デザイン研究論文集, No. 8, pp. 1-10, 2010.
- 36) 平野勝也, 川端剛弘: 建造物の景観評価における文脈依存性—擁壁を例に—, 景観・デザイン研究論文集, No. 9, pp. 83-89, 2010.
- 37) 奥敬一, 深町加津枝, 三好岩生, 堀内美緒: 大井川中流域の茶園卓越景観における日中の来訪者による景観認識比較, ランドスケープ研究, Vol. 72, No. 5, 日本造園学会, pp. 657-660, 2009.
- 38) 大石智広, 稲垣栄洋, 高橋智紀, 松野和夫, 山本徳司, 栗田英治: 静岡県農農業景観の選好特性の属性間比較, ランドスケープ研究, Vol. 72, No. 5, 日本造園学会, pp. 889-892, 2009.
- 39) 佐々木葉, 佐々木哲也: 歴史的ボーストリングトラスを転用したりんどう橋のデザイン, 景観・デザイン研究論文集, No. 5, pp. 17-26, 2008.
- 40) 伊藤登, 横山公一, 高堂治: 新たな変形特性による鋼製橋梁用車両防護柵の開発, 景観・デザイン研究論文集, No. 5, pp. 27-34, 2008.
- 41) 國井洋一, 古谷勝則: フラクタル解析を用いた尾瀬国立公園におけるシークエンス景観の定量分析, ランドスケープ研究, Vol. 73, No. 5, 日本造園学会, pp. 585-588, 2010.
- 42) 是澤紀子: 近世初期三輪山における禁足の制定とその景観, 日本建築学会計画系論文集, Vol. 79, No. 700, pp. 1433-1439, 2014.
- 43) 押田佳子, 横内憲久, 岡田智秀: 十返舎一九「金草鞋」を通じてみた近世鎌倉観光における通過地点の景観構成とその観賞形態に関する研究, ランドスケープ研究, Vol. 73, No. 5, 日本造園学会, pp. 519-522, 2010.
- 44) 國居郁子, 工藤和美, 山崎寿一: 地場材料玄武岩に着目した集落景観構成に関する一考察, 日本建築学会計画系論文集, Vol. 76, No. 665, pp. 1241-1249, 2011.
- 45) 小谷仁務, 横松宗太: アーティファクトとしての地域資産と住民のアイデンティティ形成—カテゴリー選択モデルアプローチ—, 土木学会論文集 D1, Vol. 71, No. 1, pp. 10-25, 2015.
- 46) 白柳洋俊, 平野勝也, 和田裕一: 感情プライミング効果に着目した商業地街路の基本的性格, 土木学会

- 論文集 D1, Vol. 69, No. 1, pp. 90-99, 2013.
- 47) 塚田伸也, 森田哲夫, 橋本隆, 湯沢昭: 群馬県中学校の校歌を事例としたテキスト分析により導かれる山岳の景観言語の検討, ランドスケープ研究, Vol. 76, No. 5, 日本造園学会, pp. 727-730, 2013.
- 48) 尾野薫, 星野裕司, 増山晃太: 都市空間において記憶された経験を捉えるための一試論, 土木学会論文集 D1, Vol. 71, No. 1, pp. 133-150, 2015.
- 49) 小松佳弘, 羽鳥剛史, 藤井聡: 大衆による風景破壊—オルテガ「大衆の反逆」の景観問題への示唆, 景観・デザイン研究論文集, No. 6, pp. 23-30, 2009.
- 50) 上原三知: 森林セラピーロードにおける森林散策路の景観評価と心理面における森林浴効果との関連性, ランドスケープ研究, Vol. 73, No. 5, 日本造園学会, pp. 413-416, 2010.
- 51) 山崎嵩拓, 坂井文: 農業に関わる地域産業施設が創出する景観に関わる施策と実態—十勝地方の帯広都市圏における地域産業施設の建築規模と植栽に着目して, 日本建築学会計画系論文集, Vol. 82, No. 732, pp. 433-442, 2017.
- 52) 大山雄己, 羽藤英二: 街路景観の連続性を考慮した逐次的経路選択モデル, 日本都市計画学会学術研究論文集, Vol. 47, No. 3, pp. 643-648, 2012.
- 53) 劉澤, 趙世晨: Axial Map を用いた伝統的建造物保存地区の空間位相的接続性の分析に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, Vol. 80, No. 716, pp. 2283-2292, 2015.
- 54) 平野勝也, 佐藤俊介: 表面テクスチャの凶になりやすさに着目したコンクリート汚れの視覚的評価, 景観・デザイン研究論文集, No. 5, pp. 77-84, 2008.
- 55) 文化庁ホームページ「重要文化的景観について」, <https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/keikan/chiran.html> (2020年2月27日閲覧).
- 56) 土木学会 景観・デザイン委員会: 土木学会デザイン賞作品選集, pp. 89-90, 2017.

(Received September 10, 2019)

(Accepted April 21, 2020)

## A TREND OF LANDSCAPE RESEARCH FROM GENEALOGY BY THE PURPOSE —AS A TARGET FROM 2008 TO 2017—

Hisashi SHIBATA, Katsuhiko SAITO and Ryutaro IKEDA

The purpose of this article is to clarify a trend of the issue in landscape researches. We did the review of landscape researches from 2008 to 2017 and showed genealogy by the purpose. Using these data as a basis, it attempts to grasp their trends and show a perspective for the coming studies. Major findings include the followings: 1) We grasped that 484 landscape articles were published in the ten years. 2) 35 issues and genealogies were clarified as the trend of landscape research. 3) It pointed out the future issues of landscape researches that 1) The rethinking conservation for natural and cultural landscapes, 2) Thoughtful and methodological considerations to balance disaster prevention and landscape, and 3) Design method effective for the system to improve the quality of civil engineering structures.